

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

びわ湖ファンを増やすにはどうすればいいの？
(A-1グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

- ・びわ湖へのリピーターを増やす、そのためには思い出づくり。思い出は五感をつかった体験から、世代や目的別の観光コースをつくる、琵琶湖博物館と観光をセットにするなど、びわ湖の良さについても話し合った。
- ・キーワードは「憩い」「やすらぎ」「いやし」。
- ・びわ湖のよさを知るために「うみのこ」は素晴らしいとの発言もあった。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

- ・課題のひとつとして、情報不足、もっと観光情報の発信を。
- ・滋賀県人はアピールが下手、奥ゆかしい、もっと誇りを持って。
- ・お勧めスポットとそこでの過ごし方をプロデュースする人が必要、自動車でなくバスなどで回れるようにすべきなど話し合った。
- ・お勧めスポットとして挙がった場所は、針江、つづら尾、竹生島、膳所公園、余呉湖、長命寺宮ヶ浜など。

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

水と生き物を大切にする暮らしを、守山の地域コミュニティでどう育んでいくか？
(A-2グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

- ・豊穡の郷、碧いびわ湖の活動紹介と問題提起。
- ・日田川モデル河川での子育て世代の自然体験活動、雨水タンクの取組、石けん運動をベースに意識、行動を変えるアプローチなどの話題提供。
- ・今後の課題として、若い世代、地域とのつながりをどうやって広げていくか。
- ・高校生はきっかけさえ準備すれば、楽しみ、興味が出てくる。
- ・昔の生活や遊びから当時の環境を体験するとおもしろい。昔は川を使っていたので、管理が必要だった、などのコメントあり。
- ・自然体験をするときに、危ない、汚い・・・などの声。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

- ・昔は、暮らしと琵琶湖がつながっていたので、今のように活動・体験など、わざわざ企画する必要がなかった。
- ・遊ぶ、食べる、洗う、などの生活の一部と体験をつなげると、自然に意識が広がるのではないか。
- ・体験を準備する人として、いろいろな分野の人を関わりやすくできるのではないか。
- ・体験活動は子どもの口コミが多い。
- ・体験活動の場で親が楽できるので疲れにくいし、続きやすい。
- ・守山でホテルを通じて自治会、農業、子どもがつながり、行政が支援している。行政の支援はどうあるべきか…。

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

琵琶湖が好き？ 暮らしに密着してる？
(A-3グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

- ・メンバーの活動を聞くとともに、テーマにかかわらず色々な話をした。
- ・滋賀県、びわ湖の（観光）PRをするには？
→ 口コミ、ホームページ、寸劇、難しいことは言わず、“おもしろい”ということが大事
- ・PRをして、外にどんどん発信することは大事だと思う。
- ・地産地消について
- ・これから育っていく子供たちに、今、自分たちがやっている活動を知ってほしいし、活動に巻き込んでいきたい。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

- ・直接琵琶湖と触れ合うことで、琵琶湖への愛着がわく。
- ・寸劇をして、琵琶湖と暮らしのつながりを表現してはどうか
- ・子供たちに活動、体験、知識を伝える
- ・子供向け「MOH 通信」、子どもたちの保護者も巻き込んで。
- ・マインドマップの作成で、つながり、関係性が見えてくる
- ・指標「びわ湖と暮らしをつなぐ」→びわ湖に関する活動を、“1ビワコン”でカウントする。「今日は50ビワコン達成だ！」

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

「こどもの目、おとなの目」～環境学習を、どうすすめる？～
(A-4グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

(狙い)：体験を通して“なに”を見ているのか、共通するものはどんなことかを捉える
参加者21名（愛知県半田市から参加10名）

概要

- ・模造紙を二分割して「こどもの目」「おとなの目」の領域を作り、こどもとおとなに分かれて、これまでの体験を通して「他の人に伝えたい事」「知ってほしいこと」を付箋に書き出し張り出す。
- ・それぞれの領域に張り出された内容を全員で確認した後、こどもは、おとなの領域にはられた内容で共感できるものにシールを貼り、おとなは、こどもの領域にはられた内容で共感できるものにシールを貼っていく
- ・こども、おとな双方の領域でシールが貼られたものを比較し、傾向を話し合う

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

(狙い)：擬音語による表現で、こどもたちにとって、どのような体験が印象に残っているのか、どのような感覚を抱いた体験が心地よく、あるいは心地よくなかったのかを捉える

概要

- ・おとな、こども双方で、これまでの体験の中で、印象的だったもの・そのときの感覚を擬音語・擬声語で表現し、書き出してみる。
- ・擬音語の情景を紹介してどのような状況なのかを説明する
- ・張り出された擬音語を、こどもたちが心地よいもの、あまり心地良くないもの（と、捉えたもの）に分類し、心地良いもの、良くないもの代表2つを抽出
- ・抽出した2つの背景をこどもたちと話して、どのような状況だったのか、心の動きなどを教えてもらう。

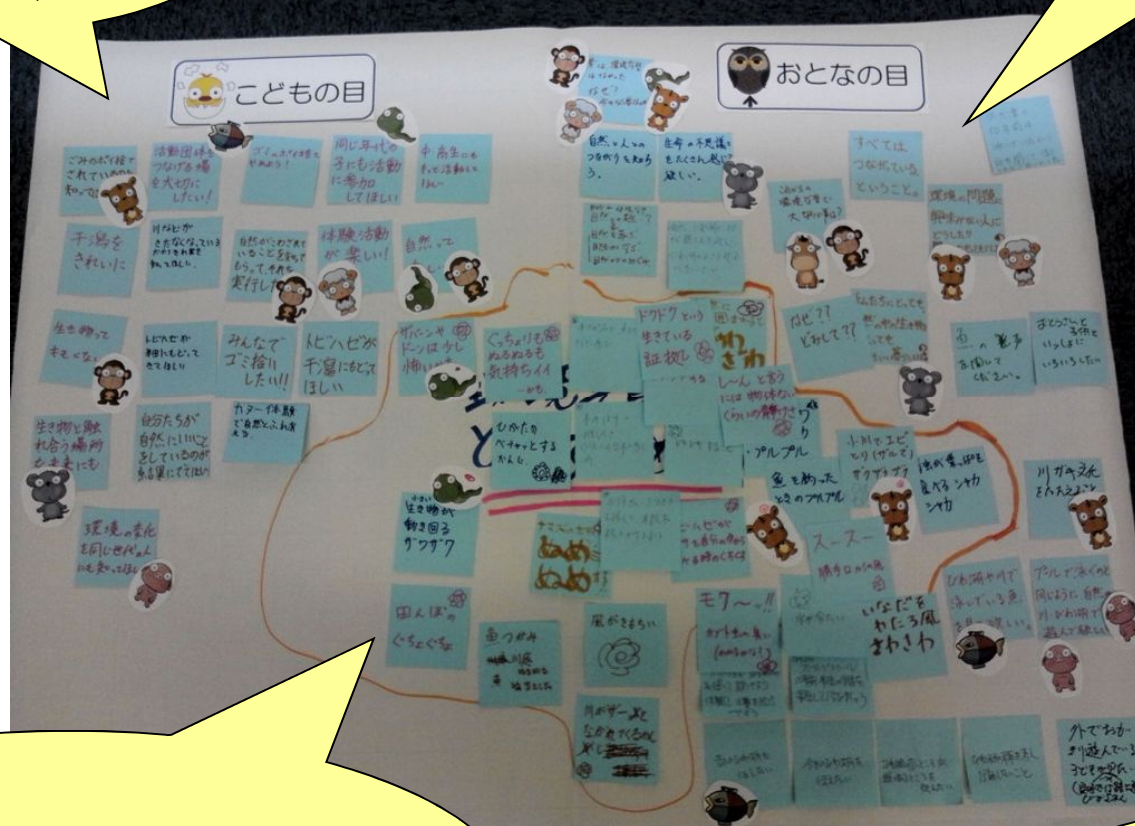
【捕捉】「こどもの目、おとなの目」～環境学習を、どうすすめる？～

【第1回】

こどもたちの「伝えたい事」(付箋)とおとなたちが共感した「伝えたい事」(動物シール)

【第1回】

おとなたちの「伝えたい事」(付箋)とこどもたちが共感した「伝えたい事」(動物シール)



【第2回】

こども、おとなそれぞれが伝えたい感覚(擬音語)ヘビのシールがはられているものは、あまり体験したくない感じのもの。犬のシールがはってあるものは体験したいと思うもの。(いずれもこどもたちが選択)
※オレンジ色枠内の左側があまり体験したくないもの、中央はどちらでもないもの、右側は体験したいもの

似たような感じでもこどもたちの予想の範囲や制御ができない状況(安心感がない)はイヤと感じる

こどもたち(半田エコクラブ)限定なので、感覚や体験にはカタヨリがあると思いますが...

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

びわ湖をきれいにするってどういうことだろう？
(A-5グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

・規制ばかりでなく、「いいもの」の流入についても考慮すべき→（・山など周辺の総合的な政策が必要。・生物など化学以外の様々な分野の技術者も入って議論が必要）

・時代とともに、分析技術や我々の判断基準も上がってきている。

・もう一度、改めて何がよくないのか議論が必要。

→この議論をするにあたっては、項目ごとの「バランス」が重要。（透明だけがいいわけではない。濁りが必要な場合もある）

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

- ・琵琶湖の一斉清掃。地域の活動→行政の活動、地域でバラつき
- ・残土、廃棄物処分の問題
- ・田からの汚濁、用排水分離、機械化、環境配慮型の農作物の市場
- ・価値を高める、農業がよくなれば琵琶湖は良くなる？
- ・微量有害物質の問題
- ・逆に今、何が汚いの？ ごみ？ 生物への影響を指標に
- ・ごみ問題、デポジット制、子どもへの教育→環境教育の必要性
- ・環境基準+ α の指標

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

企業はびわ湖のために何ができるか？

(A-6グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

13名参加

- ・ 条例などの法律を守るのは企業活動の最低限の条件であり、県内の企業はすでに他地域より厳しい法律（上乘せ条例）の下で活動している。湖南・甲賀環境協会ではすでに自主的な公害防止体制を確立し、法・条例等の研修会、環境情報交換会、水質事故被害拡大防止訓練などを行政と協働で推進している。
- ・ 生産活動における環境配慮型製品の積極的な使用が必要であり、その際は県内企業の製品を選択する「環境配慮型製品の地産地消」を推進する。
- ・ 最近では企業CSR活動として、生物多様性や自然分野に取り組んでいる企業が増えている中、取組企業同士の連携を強め、さらなる拡大を図っていく。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

引き続き、琵琶湖のための企業の役割について議論（13名参加）

- ・ 環境のための休日进行を設ける。
- ・ 琵琶湖における生物多様性の保全においては、ただの生き物の保護にとどまらず、兵庫県の「コウノトリ→環境保全（農地保全）→生業（コウノトリ米）」のようなストーリーのある「琵琶湖モデル」を作る。
- ・ 琵琶湖の保全のために、企業と市民と行政の連携が大事である。企業人と市民の顔を併せ持つ企業OBが活躍できるのでは。
- ・ 再生可能エネルギー普及のための投資を拡大する。
- ・ 企業内の省エネ診断を拡大し、さらなる省エネに取り組む。
- ・ 環境保全は継続が重要。
- ・ 企業の環境保全活動のPRやCSR活動の予算化が必要。

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

上流と下流のつながりって？

(B-1グループ)

2. 前半(1回目)の話し合いの概要

- (思い)・上流が元気でないで下流は元気になれない。
- (課題)・上流の情報が下流に伝わっていない(上流の実態や現状、林業の話など)。
 - ・上流の課題に対して下流の人ができることが限られている(所有権の問題など)。
 - ・森林所有者不明確、林業の担い手不足、獣害など課題ばかり。
 - ・アカネズミが栃の実を食べてしまう(次世代育たない)。
- (提案)・上流と下流が現場でつながることが大切。
 - ・山に行けば獣害のことがわかる。
 - ・上流と下流をつなぐ、知らせるためのイベント、広報必要。
 - ・「矢作川方式」で関係者が集まり、ハードもソフトも議論
- ・やまのこ事業からのつながりが必要

3. 後半(2回目)の話し合いの概要

- ・コーディネーターが少数でいいからいるといい。
- ・集約化で大規模整備もいいが、自伐林家も見直されている。
- ・若い人が住める山村にするには仕事が必要。
- ・使える間伐材がある。森が循環する仕組みを作ることが必要。
- ・比良山系を森に戻す取り組みを進めている。
- ・山の情報を県域で吸い上げ広報する組織が県外にはある。
- ・多分野との連携が必要(現場でつながる)。

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

ごみの大量沈殿でびわ湖の湖底は本当に大丈夫？

(B-2グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

8名が参加。

- ・ごみを減らすためにはどのような取組が重要なのかについて話し合った。
- ・草などが生えていたり、汚いのごみを捨てる人が増えるので、草を刈り、綺麗にすることが重要。
- ・環境教育が重要で、特に子供たちへの教育が必要だが、世代ごとに教育が必要。
- ・ごみをスティックに捨てるだけでなく、環境教育の場として活用したり、メリットについて地域の人に知ってもらうことも重要。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

9名参加。前半に引き続き、びわ湖に流入するごみを減らすための取組について話し合った。

- ・河川にごみを防ぐ竹のネットなどを設置し、流入を防ぐなど、河川ごとにごみを捨てる仕組みができないか。
- ・河川ごとに地域住民がごみを捨てるなど、責任を持って地域で河川環境を保全することを制度化できないか。
- ・例えばまず始めにモデル地域を選定し、しっかりとデータを取って他地域へと広げていく。
- ・ごみ拾いについては、徹底的に行う。ごみがすぐになくなることで捨てるにくなる。
- ・ごみを拾っている取組をわかりやすくすることも有効。派手な格好で拾ったりすると目につく。

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

琵琶湖のめぐみ、何を守り、後生（後世）に残したい？
(C-1 グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

参加者は2名（男性1名、女性1名）。

- ・自己紹介のあと、自由に琵琶湖のめぐみについて語っていただいた。
- ・参加者が少なかったので、主催者・進行役・記録係も適宜、話に加わった。
- ・二人とも琵琶湖に関心を持ったのは、大人になってから（数年～10年以内）。
- ・「ふなずし」づくりをきっかけに、親戚・友人などとコミュニケーションが広がっていった。琵琶湖岸での水鳥観察が楽しい。
- ・ふなずしと水鳥の話から始まって、淡水魚、釣り、湖魚食、沖島の景観や時間の流れ、琵琶湖や比良山系の景色へと話が広がっていった。
- ・琵琶湖のめぐみを後生（後世）に残すとしたら、生き物と琵琶湖をつなげる「場」づくりをしたい、水鳥の観察が楽しいことを感じてほしい、との意見をいただいた。
- ・「生き物のにぎわいを楽しむ」、「脳（知識）でなく、五感で感じるものが記憶に残る」。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

参加者は3名（男性2名（1名は継続参加）、女性1名）。

- ・前半の概要紹介および自己紹介のあと、自由に琵琶湖のめぐみについて語っていただいた。そのあと、「五感で感じるめぐみは大切」という視点から、そのめぐみを後生（後世）にどう伝えていけばよいかについて、主催者・進行役・記録係も適宜、議論に加わって意見を交換した。
- ・人と関わっている琵琶湖の風景は他府県になく好きだ。琵琶湖の風景の空間的広がり、空の広がりが好き。琵琶湖から離れたところに住んでいるが、湖辺の生活がうらやましい。
- ・おもに琵琶湖の景色や景観の話題から、祭囃子の声や音など、「子供のころの感覚や体験がその後の基準になる」という意見がでてきた。
- ・「さかなのゆりかご水田」のような場は大切だが、地元の農家だけでは数年ぐらいしか維持できない。「豊かなめぐみを守る人」を支える「外からのファン（拍手する人、ほめてくれる人、応援団）」が大事。また、応援してくれるしくみ・場をつくる必要があるか？
- ・村のため・孫のために加えて、経済的な付加価値をつくるしくみがいる。
- ・食べ物の味覚は小さいうちにつくられるという話（富山湾やフランスの食育事例）から、大人の責任でおこなう子供からの食育・五感教育が大切という意見がでた。
- ・食育の具体案として、大人が、湖魚を「食べる・採る・知る」ことを子供やそのお母さんに伝えて、習熟の度合いに応じて「湖魚道」の段位を与える「湖魚道場」を開いてはどうか、というアイデアがでた。

第2部の話し合い 振り返りシート

1. グループのテーマ

人とびわ湖との関わりは今後どうあるべきか？

(C-2グループ)

2. 前半（1回目）の話し合いの概要

びわ湖と私たちが、現在どのような関係にあるのかについて話し合った。

- ・私たちの暮らしは、1970年代以降、暮らしが大きく変化するとともに自然環境も大きく変化した。暮らしのために良いと思って取り組んだことが、振り返ってみると結果としてびわ湖で現在起きている問題の要因となっているものもあるのではないかと。
- ・昔は暮らしの中に、常にびわ湖が存在していた。現在は、その存在を感じる事ができない。
- ・内湖などの緩衝地帯がなくなり、汚れが直接びわ湖に流れてしまう構造になっている。
- ・“壊す”ことは簡単にできるけど、元に“戻す”というのは非常に難しい。

3. 後半（2回目）の話し合いの概要

びわ湖と私たちの今後の関わりについて話し合った。

- ・びわ湖と私たちの関わりを近づけるために何をするのかと考える前に、まずは皆がびわ湖の現状を知ることが必要。
- ・「環境」だけを考えてもびわ湖と私たちの暮らしはなかなか繋がらない。まずは、「遊び」や「食」というところからびわ湖に触れる機会を増やしていくことが良いのではないかと。
- ・びわ湖のことを考えるには、人だけでなくびわ湖に棲む生きもの全体を考えていく。